



3歳で亡くなった笠原昭子さん、
当時2歳の誕生日に撮った記念写真

者が増えました。息を引き取った子どもを抱えたまま、ただ呆然とする母親もいました。

避難する際、ハクガンへ出張していた保安主任の夫と、警務主任、衛生主任の三人は幸いソ連の捕虜になることは免れ、日本人が西本願寺に避難していることを聞いて無事わたしたちと合流することができました。

避難生活が続ける内、昭和二十一年十一月に当時三歳の長女は大腸カタルで命を落としました。現地の人に二十円くらい、当時としては法外な値段（現在のお金で数十万円）で火葬してもらい日本にお骨を持ち帰れたので、思い残すことはありません。そうでなければ、多くの人がしたように地面を掘り埋めるしかなかったのです。わたしたちが現金を持っていたのは、避難の際、役職に応じてお金を配分したからです。部長で七十円くらいだったと思います。

夜になると、この月が満月になったら：この次の満月までには日本に帰れるか、と思いながら月日は過ぎていきました。

日本人会の人たちから三十八度線を突破する情報を基に、わたしたちは北朝鮮からの脱出を計画し実行に移しました。昭和二十一年四月十日、威興を出発。まだ、三十センチほどの雪が積もっていました。わたしたち一行は日本軍からの逃亡兵も含め男が九人と女子ども合わせて十四人でした。十日ほどかけて七十里（約二百八十里）の山道を歩き、三十八度線を目指しました。

移動の道は、山道ですから平坦な道は少なく、積もっている雪を手でかきわけ、^は這うようにして、とにかく先に進むしかないのですが、わたしの足は偏平足のため歩きにくく、いつもビリでみんなの後ろの方について行きました。そんなわたしに夫は後ろに回り「頑張れ！みんなから遅れるぞ」と言っ

て、木刀のような棒で足を叩くのでした。
山から山へ架けられた一本橋を渡る時は、歯を食いしばり、腫れて痛くなるほど唇を噛んで渡りました。こうして、地図も磁石も無

い中で、植物の葉の向き、河の流れを手がかりにして南の方向を判断しました。

いよいよ三十八度線を越えるときが来ました。時計など目ぼしい物は取り上げられましたが、いくらかのお金を渡し、案内人を頼みました。現地にはそれを仕事としている人たちがいました。夜中の一時ごろに出発し、夜が明けるころ、ようやく三十八度線を突破することができました。更に四、五百メートルの山を越え、辿り着いた所は紋山という小さな駅で、広場があり、アメリカ兵が「カモン、カモン」とわたしたちを招いていました。そこで真つ白になるほどDDTの粉末を頭からかけられましたが、日本人の人たちからもらって食べたおにぎりがおいしかったことは忘れません。それにも増して一番に残ったのは、どこまでも青く澄んだ空の色です。どこで見ても空の色は同じはずなのに、ひと際輝いて見えました。同行の人たちと「空の色も北朝鮮とは違って見えるね」と話したことを覚えて

います。
紋山から列車で釜山まで行き、そこから船で日本へ向け出発しました。貨物船で山口県の仙崎港に

着くと、「引揚者の皆様ご苦労様でした」という放送を聞き、日本へ帰れた安堵感で涙が溢れました。仙崎からは引揚列車で各々の郷里へ向いました。

夫の郷里、成東に着いたのは昭和二十一年四月末でした。疲労のため、足が上がりず、這うようにして夫の実家に上がりました。姑は涙を流してわたしたちを迎え、親子三人揃って帰れたことを喜んでくれました。それというのも、男は皆シベリアへ送られたと聞いていたので、家族も死んだものだと思っていたようです。こうして、わたしたちは父母の待つ故郷へ戻ることができました。

その後、夫と夫の両親、4人の娘と貧しいながらも懸命に生きてきました。慣れない農作業もやってきました。今は、一人暮らしですが、寂しくはありません。毎日のように、娘たちが寄ってくれますし、近所のお友だちも来てくれます。

わたしにとって幸せとは、戦争の無いこと。罪の無い尊い命が奪われる戦争の無いことが、何より幸せです。

（参考文献 『戦中戦後を生きて』
春秋倶楽部発行／歴史民俗資料館
0475(82)2842）